

## 第2回 新清掃工場等の啓発施設整備に係るワークショップ

### 報告書

1. 開催日時：平成27年1月10日（土） 午後1時30分から午後4時30分

2. 開催会場：浜北文化センター 第2会議室（浜松市浜北区貴布祢291-1）

3. 参加者状況：33名、浜松市担当課職員 4名

担当課職員：課長 富田昌和（挨拶）、山口佳伯、加藤明彦、松本佳巳

司会：荒木信幸、ファシリテーター：松田 智

受付：藤田由己、外山直美

班名	リーダー	環境審議会ごみ減量部会	下阿多古地区	一般公募
サクラ	小楠 一			新井 康久
				市川 美鈴
				内山 ゆきゑ
				千葉 悠介
キンモクセイ	岩田 政行	土屋 京子	野中 賢一	酒井 純
				古橋 和子
				吉川 徹
モミノキ	野中 正子	土橋 登巳代	和田 憲治	岩田 浩輔
				岩田 康昭
				竹澤 隆国
ドウダンツツジ	高根 侑美	藤本 忠蔵	小柳 啓幸	飯尾 美行
				長谷川 雄将
				森廣 紀昭
クロモジ	高根 美保	村山 孝司	橋本 啓一	瀬崎 秀五
				米津 健次
				田中 浩之

4. 報道関係者：なし

5. 内容：

建設予定地周辺地域のジオラマ模型見学  
(浜北文化センター施設内)

- (1) 第2回ワークショップの趣旨 説明
- (2) 浜松市のごみ減量方針の説明：  
生ごみ減量、紙類減量の促進 ※チラシ配布
- (3) 周辺施設紹介とイベント情報 説明

(4) グループ会議

論点1：周辺環境を活かすために何が必要か？

論点2：啓発施設の具体的な「あり方」とは？

- (5) 各グループ発表
- (6) ファシリテーターまとめ

6. 報告書：表紙 事務局 高根作成 2枚

報告書 ファシリテーター 松田作成 1枚

各グループ報告書 グループリーダー作成 6枚



7. 会場の様子

富田課長のあいさつ

会場の様子

全体会議



市ごみ減量方針の説明

周辺地域の施設説明

ドウダンツツジグループ



キンモクセイグループ

モミノキグループ

閉会のあいさつ



議論の前にジオラマ模型で建設予定地の地理的状况を把握できたこと、周辺施設の中で特に近くに森林公園があり、体験プログラムなども充実していることが紹介されたことで、参加者の多くが「この場所にたくさんの人を集め続けること」の難しさを実感された様子で、議論の中身が前回にも増して具体的・現実的なものになってきたと感じられた。一見、途方もないアイデアのように見えても、この場所で持続的な集客を達成するにはこんな方策も必要なのかな、と気づかされるような発想も多々見られ、議論が前回以上に白熱し、参加者も楽しそうで時間が足りないくらいであった。

最初に、前回の言わば積み残し課題であった「啓発施設とは、如何にあるべきか?」「そもそも『啓発』とは?」の観点について議論することをお願いしたこともあり、今回はその内容が各グループで議論された。結果的には、浜松市の環境・ごみ減量政策に密着すると言うよりは、建設予定地の周辺環境に重点が置かれた内容となった。これは本ワークショップの一つの特徴として評価されるべきだと考える。

次の最終回では、啓発プログラムの具体的な中身、誰が誰に啓発するのか(運営の担い手をどう確保するのか)といったソフト的な中身とともに、施設(ハード)の具体像を示して、「市民からの提案」として結実させていただきたい。

各班のまとめから、次回に期待する事をまとめましたので、参考にさせていただいたら幸いです。

サクラ班	前回提案された8つの項目から3つに絞り込み、地域資源と清掃工場から得られる資源を有効利用する内容となっています。次回は、提案されたソフトの仕組みをどのように施設に反映させるかに関する議論を期待します。
キンモクセイ班	理念にある「学び」に関する内容がより充実してきました。施設整備にも具体的な内容が出されていますが、施設の内容と仕組みづくりをより具体化した提案を期待します。
モミノキ班	地産地消を中心に、よりソフト部分での具体化された内容が議論されています。次回は、より現実的に活かす施設の内容に期待します。
ドウダンツツジ班	前回の議論で提案された「森のエコパーク構想」を具体化した施設関係の議論が活発に行われた内容となっています。具体的な運営方針や、仕組みづくりから発生する追加設備の内容に期待します。
クロモジ班	前回の柱となっていた「集客」を、外から招き入れる集客ではなく地元の人を中心とした集客にシフトした点は、大きな変化です。大きな取り組みは議論されたようですが、運営方針や仕組みなどの細かな点までは議論されていないようです。次回は、施設と併せたより具合的な内容を期待します。

以上

新清掃工場等の啓発施設に係るワークショップ 第2回目

サクラ班 (グループリーダー: 小楠 一)



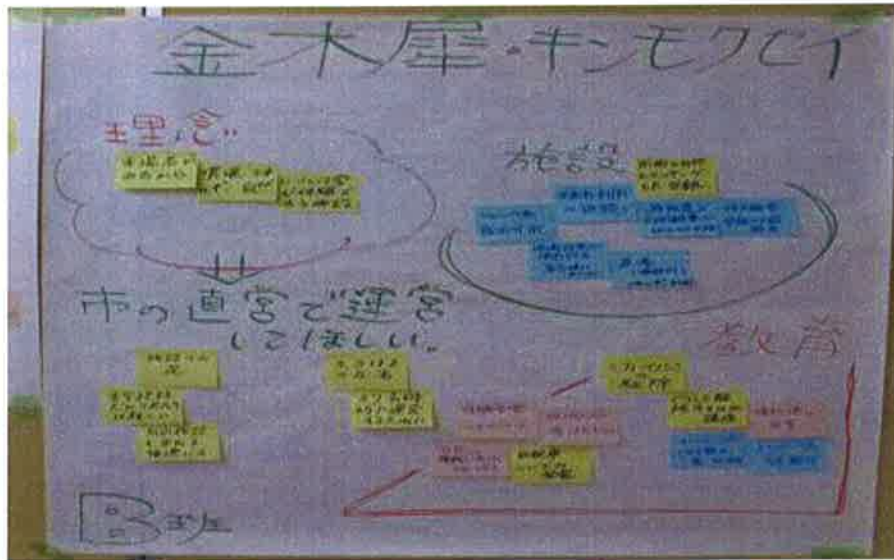
テーマ	市民が積極的に利用し、かつ市のごみ政策（3Rなど）に対する意識啓発が効果的になされるよう、周辺環境を活かした諸設備やプログラムを啓発施設整備に反映するための市民の意見	
理念	資源を活かして、多くの市民に来てもらえるような施設	
シンボル	アピールタワー	太陽の塔の様な目立つテーマオブジェ
集客	三世代で楽しめる体験イベント	間伐材を使った木工工作 桜の植林
	学校との連携・公募	図工・美術・演劇・ダンス
	ここにしかないもの	鹿・いのししの料理の提供 音楽イベント: 廃材利用の楽器コンサート
		周辺施設の売りのものを置く
3Rの啓発	教室・講座の開設（西部清掃工場で人気のあるもの）	
	家具のリユース・もったいない市	
エネルギーの利用	地域の人々に無料でエネルギーを提供	
	来場者へ無料充電・・・エコカー・携帯など	
	温泉・足湯を設け、来場者が無料で利用できる様にする	

まとめ	今回のワークショップのテーマへの意見は、見直しにより前回より絞られ特徴あるものになった。次回はこれを踏まえての具体案化を目指す。前回の様にテーマの要求事項全てに言及すると具体案作りが作業能力的に大変で心配したが、その点次回の作業は、的が絞られやり易くはなった。
-----	--



新清掃工場等の啓発施設に係るワークショップ 第2回目

キンモクセイ班 (グループリーダー: 岩田政行)



理念	市民、来場者が自ら環境・エネルギー・自然について学び体験できる施設	
施設	建物の外見も内装も地元の天竜杉を使い自然と景観を壊さず人目を引く清掃工場と啓発施設を作る	
	整備	キャンプ場を整備しBBQも出来て宿泊も可能な施設
		いつでも地域住民が自由に集まり利用できる場所を用意する
		公園、ハイキング、ジョギングコース、自然観察できる遊歩道の整備
		害獣の鹿やイノシシを駆除後に解体処理できる場所を作り利用者から肉を寄付して頂きエコクッキングの材料とする
		エコクッキングの厨房とレストランを設備する
		足湯と休憩できる空間(娯楽場)を作る
施設内から屋外の自然観察や野鳥観察が出来、巣箱をかけ餌場を作り「野鳥のレストラン」とする		
学び	牛乳パック等を利用して紙漉き体験でハガキを作る。間伐材で木工教室等を開催する	
	鹿やイノシシの剥製をジオラマ風に展示し「何故駆除しなければならないか？」地元の人やマタギから聞く。また、近郊の自然について話をしてもらう	
	工場見学の後に上記の説明や3Rについて学ぶ資料展示を見て学習するコーナーを作る	



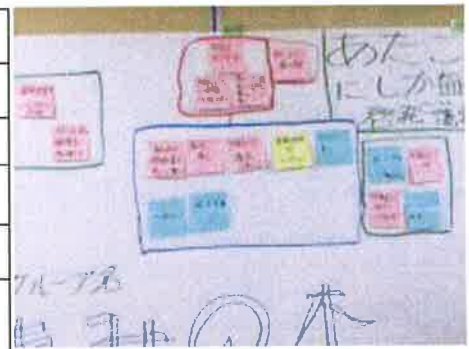
学び	<p>遊歩道等で樹木の名前当てスタンプラリーをしながら自然観察をして肌で感じてもらい自然の大切さを学ぶ</p> <p>自転車こぎの発電装置を用意して発電の大事さ大変さを体験させる</p>
エネルギー利用	<p>足湯のほかにも廃熱利用して作り野菜や果物が作れる温室を造り収穫物をエコクッキングの材料とする</p> <p>阿多古水系などの淡水魚等の水族館を作り観察すると同時に山が水を浄化して平野を流れ海まで到達する事で森林の大切さを知ってもらう</p>
アクセス	<p>CO2削減も考慮し最寄りの駅にレンタサイクルを設置。西鹿島駅からコミュニティバスを循環させ工場に到着後は近隣の施設も廻りバス停以外でも昇降でき地元の人たちの足としたい</p>

まとめ	<p>理念も基本も第一回と変わらないが少し具体的に各々が見えてきたように思われた。いかにすれば「一度だけ」ではなく「何回でも来たくなる」ことに議論が集中した。市民参加のミニマラソンや自然観察ウォーキングラリー「北部もったいない市」等を開催して森林のテーマパーク的な施設とし、子供・大人お年寄りも楽しく「遊び・学び・集える」施設にしたい。</p> <p>最後に、これは理念に加えるべき事項ではないかと思われるが、以下付記する。この施設を浜松市直営にすれば自由度が増し色々の事が出来ると考える。例えば赤字になるコミュニティバスの運行、来場者が少なく不採算なイベントの開催等である。そうすれば「えこはま」で出来なかった事が出来るのではないかと議論に至りました。</p>
-----	---

新清掃工場等の啓発施設に係るワークショップ 第2回目

モミノキ班 (グループリーダー：野中正子)

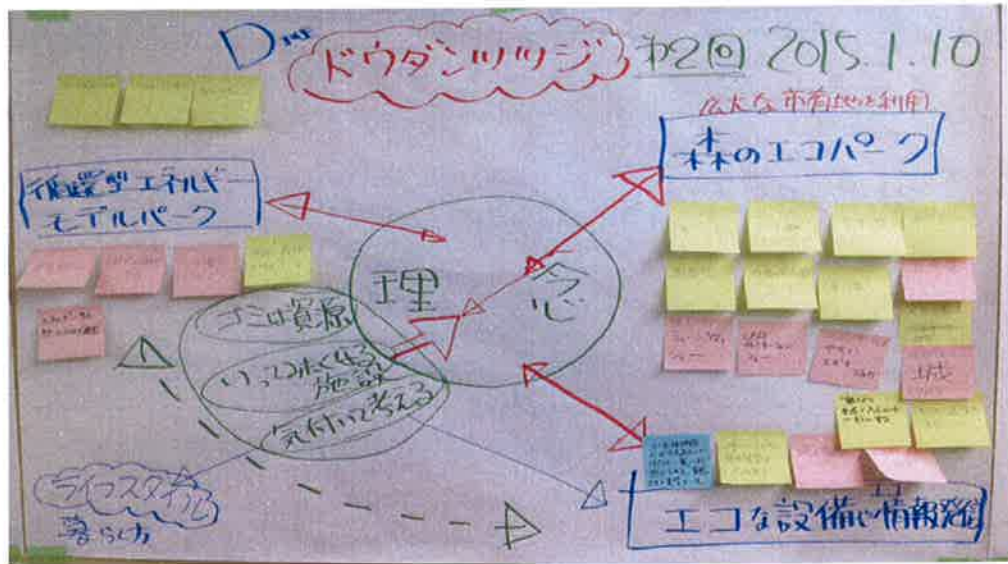
理 念	阿多古にしか無い啓発施設 (道の駅のイメージ)	
	「阿多古の暮らし」を体験して感じ、気付いてもらう	
感じる・気付く	歩く	
	森の中の遊歩道で自然とふれ合える	
	阿多古川の清流で感じる (水をきれいに)	
	食べる	イノシシ、鹿の利用 (食べ方、料理工房)
		阿多古川の鮎・うなぎ、カニのつかみ取りができ調理して食べられる
		竹料理の作り方(竹林整備したもの使って)
	集う	サロンで集う (年寄りが集まる、阿多古の人に会える施設)
		ブラっと行って体験できる
		老若男女が集いともに学べる (昔の暮らし)
	買う	地域の産物が手に入る (ジビエ肉・竹粉末・ヒノキ)
イノシシ、鹿、鮎弁当のようなものが手に入る		
阿多古体験	アップダウンを活かした遊歩道で自然体験場を結ぶ	
	昔からの魚のとり方 (うなぎ、アユ、カニなど)	
	総合案内的な体験施設	
	更新用地でドッグランできる	
	老若男女が地場のものを体験できる	
	間伐、下刈り体験	
	作物を荒らす猪、鹿の解体施設	
まとめ	<p>施設から半径 5 km 以内で豊かな自然を活かし自然に触れ、体験できる「場」をアップダウンある地形を生かした遊歩道で結ぶ。</p> <p>阿多古の案内ができ、老若男女が集える施設をつくる。更新用地をドッグランに利用する。</p> <p>若者は昔体験と高齢者の知恵(ごみを出さない暮らしも含めて)を学び、高齢者はそこに集い地域の体験を語り継いだり技術指導をしたりすることで生き甲斐が生まれる。</p> <p>その結果、訪れる事でごみ減を自ら学べる環境整備ができ、にぎわいを取り戻し、家族みんなで訪れ楽しめる施設になる。</p>	





新清掃工場等の啓発施設に係るワークショップ 第2回目

ドウダンツツジ班 (グループリーダー：高根侑美)



理念	“ごみ＝資源” という共通認識を浸透させる
	人が行ってみたいくなる施設にする
	ライフスタイルの在り方について、自ら気付き考える場にする
循環型エネルギーのモデルパーク	エネルギーの地産地消
	新清掃工場のエネルギーや熱で 100%運営
森のエコパーク	足湯の設置
	熱帯植物園や野鳥園の設置
	ニジマスの養殖場や釣堀の併設
	マンゴーやドリアンなど熱帯地域の果物の栽培や販売
	遊歩道の完備
	セグウェイや電気自転車での施設内移動
	光や音のイルミネーション開催
	城のようなシンボルになるものを建築
	地元企業 (例：ヤマハやスズキなど) の協力
エコな設備や情報発信	来館者と事業者の入り口は別
	揚水式水力発電の導入
	小規模水力発電の導入
	ごみの臭いまで感じられる実感見学コース
	地球環境とライフスタイルを関連付けた情報提供

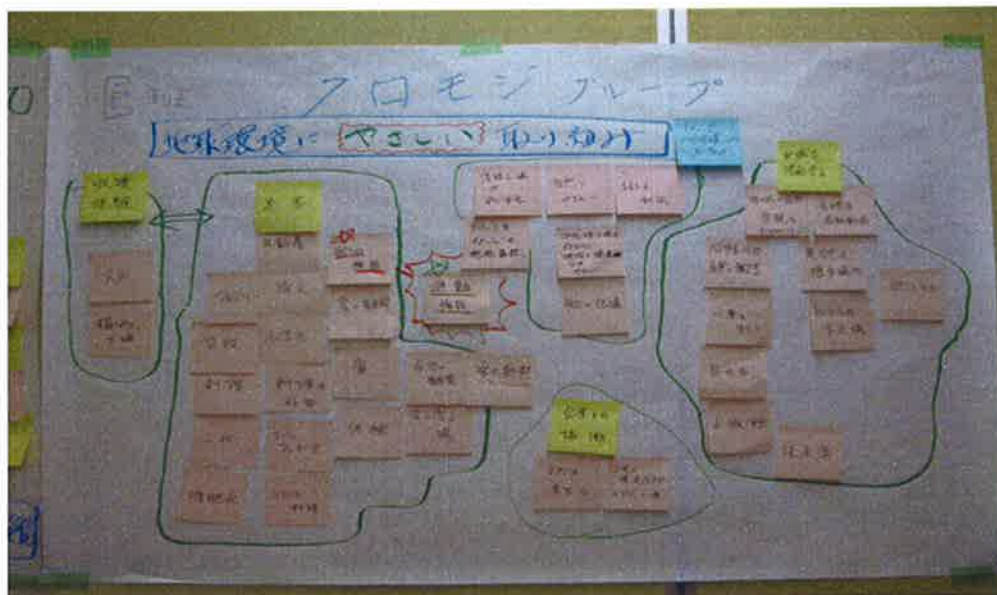


まとめ	第1回目のワークショップで提案された意見を基に、理念について更に追求した議論を行った。理念を上記3つに設定し、それを実現するために必要な施設の機能や設備（ハード面）に関する意見はたくさん挙げられたが、運営方法や仕組み作りなどソフト面に関する議論はほとんど行われなかった。最終回の第3回目では、それらに関する具体的な意見の提案を行う。
-----	--



新清掃工場等の啓発施設に係るワークショップ 第2回目

クロモジ班 (グループリーダー：高根美保)



理念	地球に“やさしい”取り組み	
環境の保全	ごみ処理工場をつくるが地域の自然環境にやさしい (清掃工場は安心・安全)	
	施設名称：クリーンなイメージの名称にする	
集客	設備	宿泊施設：地域の避難施設とする
	対象	成人、小学生、ファミリー、学校 親と子供：共に学ぶ場所づくり
	お薦め	夜空の観察：寝て観察できる場所をつくる
	循環の輪	収穫体験ができる、畑を作る
		植物工場を誘致する
		生ごみは、堆肥化する
料理体験：エコクッキング、ジビエ料理		
協働	学術関係へのラボの貸出	
	企業環境活動のPRの場所	
地域を活用	地域の自然を守る。大切にする。	
	阿多古川の自然の維持	
	魚（淡水魚）を飼育する	
	工場排水を利用した水族館	
	立地を有効利用する	
	知恵の伝承：意欲を増す、自ら学ぶ場所づくり	



まとめ	第1回目の集客を柱に理念とする「地球にやさしい取り組み」と周辺地域の環境を合わせたプログラムを検討しました。また、1年を通じて各年齢層が体験できるプログラムの構築と周辺地域の良さを活用できる内容を検討。第3回目では、より具体的なハードの部分を検討します。
-----	---